

カノープスを見る

倉谷 寛

長寿の星を眺めてみたい

全天で、一番明るい恒星と言えは今の季節、南天にひときわ明るく輝いているシリウスです。この星は大犬座という星座にあって、オリオン座とともに冬を代表する華やかな存在です。それでは、全天で第二番目に明るい恒星はどこにあるのでしょうか。大犬座から南の地平線に目を向けると、^{カノープス}竜骨座という星座がありますが、この星座の中に全天で二番目に明るい恒星カノープスがあります。しかし、ほとんどの方は、そんな星の名前を聞くのはじめて、見たこともないとおっしゃることでしょう。

ところで、お隣の中国ではこの星のことを南極老人星と言って、とてもおめでたい星とされていて、昔から「この星の光を眺めると、長生きできる」と言い伝えられています。

長寿の星が、富山でも眺められないものだろうか、と軽い気持ちで始めたカノープス探しは、ちょうど満10周年を迎えました。今でも晩秋から冬の季節となって、この星が眺められる頃になると、夜は落ち着かなくて、晴天の日には深夜家をぬけだして、カノープス探しに出かけています。

富山で見えるのだろうか

カノープスは、かなり南にある星なのですが、もし地平線が見通せるところであれば、北緯 $37^{\circ}19'$ より南の緯度に住んでいる人なら見ることができます。

富山県内では、朝日町宮崎で北緯 $36^{\circ}58.6'$ また、石川県境の氷見市平で北緯 $36^{\circ}58'$ ですから、もし南の地平線が見えれば、県内全域が見える範囲に入っていることになるのです。しかし、富山県はどこへいっても南に山脈が連なっていて、スカイラインは水平線より高くなっています。もちろん高い山へ登れば地平線を望むことも不可能ではありませんが、この星が南の空に最も高く昇るのは、晩秋の深夜から早春の夕刻にかけてなので、高い山へ登ってみることは不可能に近いことです。

それでは、平野部に近い場所で眺めることはできないものなのでしょうか？

結論からいいますと、もし地球上に空気がなかったら、富山県でこの星が見える場所はなかったことでしょう。しかし幸いなことに？空気があるため、光の屈折で地平線方向に近い星は、大体月の直径分、つまり 0.5° 位浮き上がって見えます(図1)。この助けをかりて辛うじて、見ることのできる場所があったのです。

カノープスの観察場所は、南方の山ができるだけ低く見えるところが良いわけですが、つまり、山からできるだけ離れれば良いわけですが、県内の沿岸部から、南の山を遠望して、どこかに窓が開いているところがないものか探しました。

カノープスをさがす

まず最初に富山市内で見える場所はないか探してみました。最も条件の良さそうな場所は、浜黒崎海岸近くでした。1981年12月5日、ここで南の低い山の上にカノープスが顔を見せてくれないかと期待しましたが、ここからはカノープスのすぐ上にある星までは見えるのですが、残念ながらカノープス自体を見ることはできませんでした。

それでは、県の東部方面はどうでしょうか。こちらは、立山連峰とそれに連なる高い山がびょう

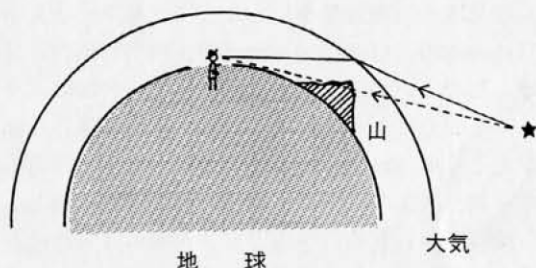


図1 星の光は本来地球に大気がなかったら、山にさえぎられて見えませんが、大気の屈折により見ることができます。



図2 氷見市懸札で撮影されたカノーブス

ぶのようになっていて、平野部からは全く不可能でした。

次に、富山市から西へ、新湊市辺りにかけての海岸沿いを調べてみました。この方面も浜黒崎と良く似た条件の場所が何ヶ所ありますが、やはり不可能でした。さらに、県西部の氷見地方へ足を延ばし、氷見から能登方面へかけての海岸部を、氷見市脇のあたりまで調べました。可能性の高い場所へは、何回も出かけて観察を続けました。しかし、ここでは海上のまぶしい漁火と、冬の海に立ちのぼる水蒸気で、見通しがさまたげられ、まだカノーブスを見つけるには至っていません。

結局、県内の沿岸部では見ることができず、残るは氷見の市街から西へ続く丘陵地です。ここでは、石川県境に通じる峠道が、何本か通っているので、そのようなところから、観察に適した場所がないか探しました。

カノーブスを見る

氷見市の丘陵地帯を捜しまわった結果、氷見市懸札地内の、標高 310m 地点で、南方に開けた見晴らしのよい場所がありました。南方の山のスカイラインのちょうど真南の辺り、山の稜線の一部がえぐり取られたように開いているところがあるのを見つけました。この窓を、地図で調べたところ城端町から五箇山へ通じる「人喰い谷」の峠が通っているところでした。ここから、きっとカノーブスが横切るのが見えるだろうと思われました。

1982年12月19日の深夜、現地で観察を開始しました。目標方向の空へ双眼鏡を向けてじっと観察



図3 カノーブスの見える場所

を続けました。予定時間が迫ると、ダメかもしれないという思いも一瞬頭をよぎりましたが次の瞬間、視野に明るい星の光が飛び込んできました。窓からカノーブスが顔を出した一瞬です。時刻を見ると20日、0時20分でした。とうとう来たか！と初対面のカノーブスに声をかけました。ついで、これをカメラに収めなければなりません。はやる心を抑えながら慎重にカメラセットを行い、数駒の撮影を行いました。発見から18分間、それまでの搜索時間に比べれば、あっという間でしたが、カノーブスは窓の間を西へ移動し、まもなく山のシルエットに隠れて行きました。このようにして県内で初めて、カノーブスの光を写真に収めることに成功したのです(図2)。

その後、さらに平地に近い場所での候補地を探しました。その結果、次の年の1983年11月3日。先の地点から南下下がった、氷見市縁ノ庄という標高 155m 地点でも観察することができました。このあたりでは、近くの山にさえぎられるぎりぎりの限界に近く、山の間をすり抜けるようにして通過するカノーブスの光を、ここでは10分間ばかり眺めることができました。この日は、空気の透明度が良く、星が山のシルエットから飛び出してきたときは、非常に明るかったので、てっきり車のライトがたまたま観測方向に光っていると勘違いしたほどでした。しかし、その時撮影した写真から、地球の自転による星の動きや、他の星との位置関係もチェックして、カノーブスであることを確認しました(図3)。

昔の人も見た？カノーブス

ところで昔、氷見から石川県への峠越えの道がいくつかありましたが、その中でも標高 380m の荒山峠は、頻繁に人が往来したところとして有名です。晩秋から冬にかけての深夜、ここを通った人も少なくなかったことでしょう。この峠から氷見側へ少し下った所には、南の山のスカイラインが遠望できる見晴らしの良いところがあります。この季節、深夜にかけて峠越えをした人が、カノーブスの光を見たとしたら、それを星の光だとは夢にも思わなかったでしょう。ある時は、赤っぽい光が、微かにゆらめき、またある時は、異常に明るいオレンジ色の光が、じーっと光って、しば

らくで消えて行ったのですから、これを見た人は、とても奇妙な感じにとらわれたことでしょう。

この峠には、昔からキツネにまつわる民話が伝えられていると言うことです。昔の人の、カノーブスとの遭遇体験が、キツネ火として後世に伝えられているのかも知れない。という思いが、私が氷見の山を歩いている最中に頭の中をよぎりました。

現在、この峠からのカノーブスの見え方を確認するため、晴れた日をねらって、深夜の峠通いが続いています。

(くらたに ひろし 副館長)

幻の淡水魚「イタセンバラ」発見その後

南部 久 男

富山平野の川では、フナやメダカなど昔ならどこにでもいた魚が河川の工事などで年々少なくなってきました。フナを小さくした体型のタナゴの仲間もフナに混じってよくみられたものでしたが、最近では小矢部川水系などのごく限られた川でしかみることができなくなりました。

「イタセンバラ」、この聞きなれない淡水魚もタナゴの仲間です。平成2年の秋に、富山県では約30年ぶりに氷見市で発見されたのを新聞やテレビで知った人も多いことでしょう。イタセンバラは1974年（昭和49年）に国の天然記念物に指定された全国的にも限られた地域にしか分布しない淡水魚です。富山県では絶滅してしまったと考えられていましたので、貴重な発見になりました。氷見市の水田地帯でひっそりと生きていたイタセンバラ、発見されてから調査が行われ、しだいにその生活の一端がわかるようになってきました。

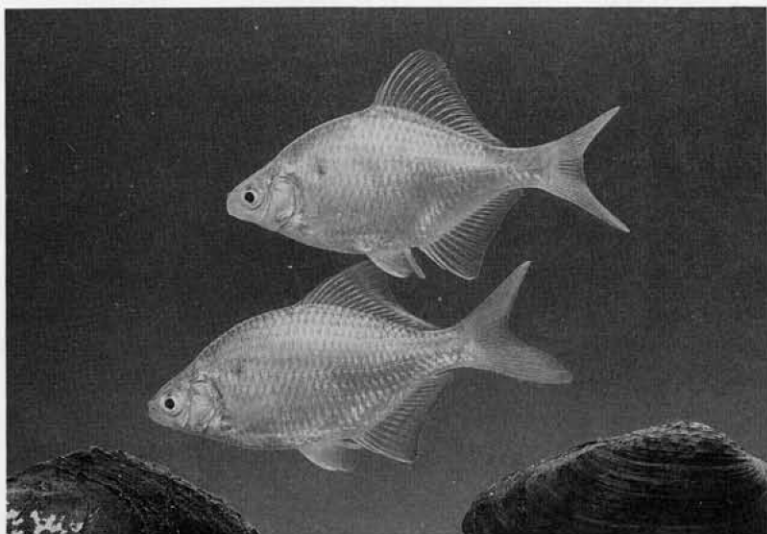


図1 発見されたイタセンバラ（共にメス）

再発見のきっかけ

再発見のきっかけは、平成元年の11月にさかのぼります。近畿大学の小谷昌樹さんら4名が、イタセンバラらしき魚1匹を氷見市の万尾川で発見しました。魚はその場に返されたので、その時ははっきりとイタセンバラかどうかは確認できませんでした。そのため、翌年の平成2年10月に、イタセンバラや淡水魚に詳しい田中晋先生（富山